

講演

# 市民主体の 子育て支援のまちづくり

汐見稔幸（東京大学大学院教授）

NPO ワーカーズコープと労協センター東京が主催し、協同総研が協賛した子育てシンポジウム「子育て支援のまちづくりを、市民の手で」が3月5日（土）、板橋・東京家政大学三木ホールで開催されました。東京大学大学院教育学研究科の汐見稔幸教授に「市民主体の子育て支援のまちづくり」と題し、記念講演をいただいた内容をまとめました。（編集部）

## 社会を変える子育て支援

子育て支援をこれからどのように展開していったらいいのか、ということで技術論と申しますか、ノウハウを勉強しあうことももちろん大事なのですが、これからの日本や世界において子育て支援がどういう意味をもつ営みなのか、子育てを支援の展開ということを社会のあり方の提案につなげていくために、私たちはいま何を考えなければならないのか、このことが存外に大切だと思っています。しかしそういう視点での議論は、まだ十分展開されていないと思います。

子育て支援として行われている個々の営みをどのように展開していくのか、ということだけでなく、日本を本当に住みやすく自分がそこに生まれ育ったことに誇りを持つような社会にすること、そして自分た



ちだけが幸せになるということではなく、世界のいろいろな人たちと上手に手を携えながら、何とか幸せになっていく道を探るために、私たちはどのような努力をしたらいいのか。そのことを考える。そのようなこととつなげて、子育て支援という営みをもう一回考え直してみる。ぜひ、そういう方向で議論し合っていただきたい。そのために本日は「子育て支援と公共性」ということを考えてみたいと思います。

## 子育ては個人の営みか？

子どもをつくるかどうか、どうやって育てるかを決めるのは、さしあたり、子どもを産んだ親であり、個人です。しかしひとつの社会のなかで、みんなが子どもを産むのを一斉にやめたとしたら、その民族なり、国家はなくなってしまいます。子孫がゼロになれば、その社会を次に担う人はいなくなり、社会も廃れてしまいます。今まで私たちの先祖が必死になって、この社会づくり、もっと豊かに生きられるようにと、必死の格闘をし、歴史をつくり、つなぎ、ここまで来た。そして私はここにいる。

でも、もう産むのをやめようと誰も産まなくなったら、見事に歴史も消えてしまう。そういう選択が私たちに許されるのか。つまり、子どもをつくるかどうか、どう育てるかは、親であり個人だが、その意志がある方向に固まってしまったときには社会がなくなる。子育てというのは、純粋に個人の営みと考えていいのかということが疑問になります。



それから、子どもが社会の中にいることによって、得をする人はいったい誰なのか。私たちの社会の中に無邪気な子どもがいなしとしましょう。多分大変潤いのない社会になってしまうだろうと思います。たいていの人は孫ができると「かわいくて仕方がない」と言います。それまで必死になって社会のために、家族のためにとやってきた。そのために着ていた衣、鎧をぜんぶ捨ててしまったときに、孫がなんとかかわいいことか。

小さな子どもは、私たちが元気をもらい、生命を活性化させてもらう、そういう存在としてあるわけです。「あ～、楽しいね」ということをやっている時には、たぶん自分の中の子どもの部分が活性化しているのを感じるはずです。あるいは、私たちが名誉や地位、お金ではなく、もっと大事なものがあるんじゃないかと感じるとき、そこに素直な自分を発見しますが、それが私の中の子どもとリンクしているのを発見します。子どもは名誉とか地位とかお金で動くのではなく、ただそれがおもしろければ動く。同じような気持ちが自分の中にあることを発見したとき、自分に戻れた気がするのです。つまり、私たちは自分のなかに子どもの部分を背負って生きているわけです。大人になったら子どもの部分が消えているかという、そうではなく、子どもの部分をずっと中に引き継ぎながら生きています。それが活性化したと感じるときに幸せになれる。

## 社会が持つ最も重要な資源

そういうことを考えていくと、子どもというのは、ある象徴なのだということに気

が付きます。実際のある背丈である相貌を持った人間でありながら、社会のある種の活力の源であったり、将来へ夢を託すべき存在であったり、私を原点に連れ戻してくれたりするわけで、子どもがいなかったら、社会の活力が生まれず、歴史を継ごうという意志も生まれません。子どもというのは気づかれにくいのですが、きわめて重要な独特の存在なのです。

私たちが子どもの育ちを応援する、ということとは、私の子どもの育ちをきちんと実現させようということだけではなく、社会のもっている活力とか、社会の潤い、社会の夢、そして私自身の活性化にすべてつながっているわけです。

だとすると、子どもという存在は、私の子どもでありながら、私だけの子どもではない。社会が持っている共有財産、社会が持っているある意味では一番大事なインフラストラクチャー、資源、象徴ということが出来ます。

私たちは、歴史の中でたまたま偶然に生まれてきたのですが、その歴史が次に自らをつないで行くときの、つなぎの役割を果たしてくれる一番大事な存在が実は子どもです。子どもというのはそういう意味で、うまく定義しきれない。大変複雑で、貴重な位置にいる存在と思えてなりません。

子育て支援というのは、その社会がよい社会になっていくかどうか、ということを決定するほどの重みのあることで、個々人の営みである子育てが、実は社会が全体として持っている営みでもあるという二つの性格を併せ持っていると思います。これを統一的に理解しようとしたら、子育てとい

うのはもともと社会の営みで、親はそれを分担して受け持っている、分有している、という風に考えた方がひょっとしていいのかもしれない。

その意味で、子育て支援というのは、子育てという営みをどれだけ公共的な営み、みんなが共通に大事にする営みとして位置づけることができるか、そういう社会をつくれるかという闘いなんだと思っています。

### 公共性とは何か？

最近、「公共性」とか、「公共の営み」という言葉がよく使われますが、子育てのあり方、というものを考えたとき、やはり公共性ということと子育てを関連させて考えることが一番わかりやすいのかな、という気がしています。ちょっと回り道をしますが、公共性とは一体何なのか、ということについて一緒に考えていただきたいと思います。

公共性について考えるとき、私が一番参考にしてしているのは、ハンナ・アーレント (Hannah Arendt) という思想家です。アーレントは、ナチスの迫害を逃れてアメリカに亡命して活躍した女性で、代表的な著作に『人間の条件』があります。アーレントはその中で、人間の行為をレイバー (labour)、ワーク (work)、アクション (action) の3つの類型に分けています。レイバーは労働、ワークは仕事、アクションは活動と訳されていますが、それぞれ何を指すのかというと、レイバーは動物として生きていくためにやむを得ずやる行為です。食べることのためだけに行う行為というのは、それほど価値が高くない。ワークというのは、職人の

仕事を頭に置いていただくとわかりますが、何かをつくることによって、歴史のなかに残っていくような、そういう制作行為のことをワークと言っています。

しかしアーレントが一番大事だと言ったのが、実はアクションなんです。アクションとは、その人が属している共同体の利益のために、つまり全体の利益、共通の利益のために人間が何をしたらいいのか、どうすれば、共通の利益がうまく実現するのか、そのことに絶えず関心を持って絶えず議論し続ける、そういう行為のことです。アーレントは、私的な利害を離れて、そうした公共の利益のために市民がいつも議論しあえる、そういう空間のことを公共性と言っているわけです。

たとえば、古代ギリシャ特にアテネの市民たちは、食べるための労働は奴隷に任せ、自らは広場に出かけて、「戦争すべきかどうか」「税金を上げるべきかどうか」ということについて日々議論していました。上手に自分の考えを主張できることが、その人間の能力として高く評価され、その時に相手をどう説得するか、ということが、その人間の卓越性の重要な条件だったわけです。そしてそういう空間や関係を持っていることが、人間の行為のなかで一番大事なことであり、それをアーレントはアクションと言ったわけです。

このアクションが成り立つための条件は何かということ、「人間は一人ひとり全部違う」ということを前提とすることです。一人ひとりの違い、個人性、固有性、そのことを徹底して認めあう。そこにはじめて議論が成立する基盤がある。そのことが成り立つ関

係、空間のことを公共空間と言っているわけですね。

### 本当の民主主義が成り立つ条件

アーレントは、公共性のためにどうすればいいのか、公共の利益のためにどうすればいいかをしょっちゅう議論していることが人間の務めなんだ、それが人間の条件なんだ、と言うわけです。私は「何を夢みたいなことを言っているのだろう」とはじめ思っていました。ところが、社会主義体制があちこちで崩壊し、資本主義が一人勝ちみたいな形での上がってきて、社会があちこちで苦しくなっている。日本も競争秩序に巻き込まれ、そこから落ちこぼされた人たちを救えないような現状があちこちで出てきている。それを救おうという新しい運動もあちこちで起こって起きていますが、救えないままその犠牲になっている人たちもどんどん増えています。日本では、いま年間3万5千人くらいが自殺していますが、ダントツで世界一です。一昨年の男性の自殺率は、40.1人(10万人当たり)でした。アメリカの2倍ぐらいですね。自殺者が多いということはどういうことかということ、社会でなんらかの形で追いつめられた人を救う力を当の社会が持っていない、ということです。弱者に対して冷たくなっていった社会であるということなんですね。

そういうことで改めて「こういう社会で本当にいいのか」「どういう社会をつくったら、一番人間が幸せになるのか」という議論が始まっているわけです。その時に、浮かび上がってきたキーワードが「公共性」という





ことです。

ひとつの社会が健康であるかどうかを見る時に、その社会を構成している市民が、その社会全体の利益のために、「何をすればいいのか」「何が全体の利益なのか」としょっちゅう議論している、ということを基準にする。そういう雰囲気がない限り、その社会は健康にならない、ということです。

いま私たちが「どういう社会をつくれればいいのか」「つくらなければいけないのか」と考えた時に、市民であるわれわれが、自分の家族のこと、自分の会社のことをいったん離れて、社会全体、アジアや地球全体の将来にとって、何が一番大事なのか、それをいつでも議論し合え、いつでも見解が言え、いつでも見解も変えられる、そういう力をみんなが持って、わいわい議論し合ってい留。そういう環境がない限り、民主主義といっても形骸化している可能性がある、ということなんです。

詳しくは省略しますが、アーレントは結局、公共の利益のために市民がしょっちゅう議論しあっているという公共空間がその後どうしてなくなっていったかということを議論するのですが、先の大戦時のファシズムは、こうした公共性の崩壊野崎に出て

きたものだと分析します。公共的な議論を妨害する社会というものが登場することによって、人間は公共性をなくしてきてとうとうファシズムに至ったというわけです。アーレントは社会主義も全体主義の一つとして批判します。旧ソ連型の社会主義ですね。その淵源が、公共空間におけるアクションの崩壊だということです。

公共性は英語でいうとパブリシティ (publicity) ですが、本を出版するというパブリッシュと同根の言葉です。本を出版するということは、ひとつの情報をみんなで共有するということで、情報がすべての人に公開され、すべての人に平等に開かれている、そして、その情報の分配に不公平がないということです。いずれにしても公共性というのは、情報の共有とか情報の公開性、情報を公平に分有する、ということに関わる概念であり、議論をする、ということ抜きにはありえないカテゴリーです。

人々の共通の利益は何か、一番みんなが幸せになるのはどういうやり方か、子育て支援という営みを通じてそういうことがみんな議論できる社会をつくり上げることができるか、を議論しながらみんなで追求していく。そのことによっていかに公共性というものを日本の中に拡げていくかが問われている、という気がします。

### 公共性をめぐる対立

実は、こんなことを言うのは、公共性をめぐってすでに鋭い対立が始まっているからです。いま、子育て支援のこれからの方向をめぐって、3つぐらいの方向性がはっきりわ



かれてきました。

ひとつは、「子育てはみんなのもの、国家のため、社会のため」というのですが、その中身として、上から権威主義的にある考え方で親を型はめしていくというようなやり方がかなりはつきり出てきました。要するに、本音は「最近の親はなっていないので、学校だけでなく社会でも教育しないとイケない」「とりわけ家庭教育というものを強めて、親としての自覚を高めてもらうべきだ」という立場です。その延長で、育児能力のない親は子どもを産んではいけないとしてはどうかという議論さえ出てきています。親の立場よりも、社会や国の立場を優先させるという思想といえます。

ある面では、いま、社会の不安が増し、虐待なども増えている状況を考えると、そういうことをなくすためにも「もっと親としての自覚をもってもらいたい」と思う人がある程度でてくるのはやむを得ないとは思いますが。問題は、そこで思考を停止してしまうことです。なんで虐待までいってしまうのか、せっかく産んだわが子を虐待してしまうのか、そこにどういう理由があるのか、というところまで分析がいかない。どんな理由があろうとも、「親が自分の子どもを

虐待するとは何事だ」と誰もが思いますから、事態の深層に行く前にそこで思考を停止してしまうと、最近の親は・・・ですんでしまいます。結局親が批判される立場になります。私はこういうやり方を権威主義的・注入主義的子育て支援と、レッテルを貼っています。

二つ目は、先ほどアーレントの考え方を示しましたが、市民がみんなで、どうしたら子育てというものを楽に楽しくできるんだろうね、どうしたらこの子どもたちが将来幸せになれる社会をつくれるんだろうね、ということを下からわいわいいいながら、「こうやってみよう、ああやってみよう」とつくっていく子育て支援です。

## レッジョ・エミリアの幼児教育

イタリアに、人口数万人のレッジョ・エミリア (Reggio Emilia) 市というところがあります。ここはレジスタンスの運動の盛んだったところだそうですが、第二次世界大戦後、二度と戦争をおこさない国をつくるには、何が大事かと話し合う中で、「幼児期からの教育をもっと充実しよう」となったといいます。幼児期からの教育を充実することなしには、「二度と戦争をしない、平和こそが一番大事だ」という人間は育てられないと考えたわけです。

そして数十年、手探りでいろいろな幼稚園や保育所づくりをする中ですぐれた教育哲学者が生まれ、レッジョ・エミリア・バージョンの幼稚園、保育園がどんどんつくられるようになっていきました。実は、この小さなまちが世界に誇るべき水準の幼児教育

を実現している、ということが知られたのはごく最近のことです。1980年代にアメリカの研究者たちがたまたま訪れて、びっくりしたわけですね。こんなレベルの高い幼児教育をやっているのかと。

その様子を撮ったビデオを観たのですが、私が実は一番感動したのは、ある幼稚園での父母懇談会でした。だいたい夫婦で夜の9時頃集まって来るのですが「本日のテーマは“公共性と人間の幸福”です」などということを先生がいうと、その議論が夜中の1時頃まで続くのです。「何でこんなことが議論できるのか?」「幼稚園や子どものことを議論しているのではないのか?」と知り合いの研究者に尋ねると、ここで集まって議論するのは、公共のことなんだ、と言うのです。つまり自分の社会をよくするためにはどうしたらいいのか、ということを中心にみんなで議論しあう公共空間をそこでつくっている。いろんなところで働いているお父さん、お母さんが、社会の公共の利益のために、私たちはいったいどういう考えを持っていいのか、議論している。それは市民性の成熟の違いとしか言いようがないと感じました。自分たちの自治体がどうやったらよい自治体になるか、議論しあうことが市民の義務

という発想がまだ息づいているのです。

市民が主体となって社会をつくっていくというときに、自分の子どものことが出発点になりますが、それだけでなく、自分たちのまちが日本で一番子育てが楽で、楽しく、子育てをしている親自身も自分の自己実現ができ、住んで良かったといえる、そんなまちになるためには、どうしたらいいのか、それをみんなでわいわい議論する。幼稚園、保育所、学校で、渦のようにあちこちで議論しているようなまちづくりです。

いま、子どもを育てることは大変難しい。だから子どもを育てやすいまちにするには、どうしたらいいのか。みんなでわいわい議論をするしかない。誰に押しつけられるわけでもない、市民が私の責任の問題だと考える、とそういう社会です。

三つ目は、市場主義です。すべてを市場にのせ、競争の論理でやっていく。子育て支援も、いろんな会社が競争しあって、上手にサービスを提供してという形でやる。これは、平等に市場というものを判断する条件が市民に与えられている場合にはうまくいくかもしれませんが、そうでない時は非常に偏ったことになる。

### 子育て支援が問われている

私たちはいま、どういう子育て支援を広めているのかを問われています。市民が下から、いつもわいわい議論し合い、その中からポツンポツンといろいろなよいアイデアが生まれて動き出し、行政は市民の運動で公共性があることに対しては応援し、コラボレートしていくような子育て支援を



きっかけとして、新しいまちづくりをぜひ  
私たちの手で実現していきたいと思います。  
そのためには、私たちがこの社会の主人公  
なんだという感覚を持ち、全体の利益のため  
にどうすればいいのか、しっかりとした  
自分の意見を持って、きちんと議論すること  
によって社会をつくっていくというとい  
う自覚をもつことが出発点ではないかと思  
います。



### 汐見稔幸（しおみ としゆき）さん

#### プロフィール

1947年 大阪府生れ

東京大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。

現在、東京大学大学院教育学研究科教授・同教育学部  
附属中等教育学校校長

育児・幼児教育関係の最近の著書

『0-5歳素敵な子育てしませんか』2003年(旬報社)

『世界に学ぼう！子育て支援』2003年(フレーベル館)

『おーい父親』子育て編(パート )2003年(大月書店)

『おーい父親』父親論、男性論(パート )2003年(大月書店)

『はじめて出会う 育児の百科』2003年(小学館)

『心も身体もほんとうにかしこく育てる』2004年 主婦の友社 など

(臨床保育研究会Webサイトより)